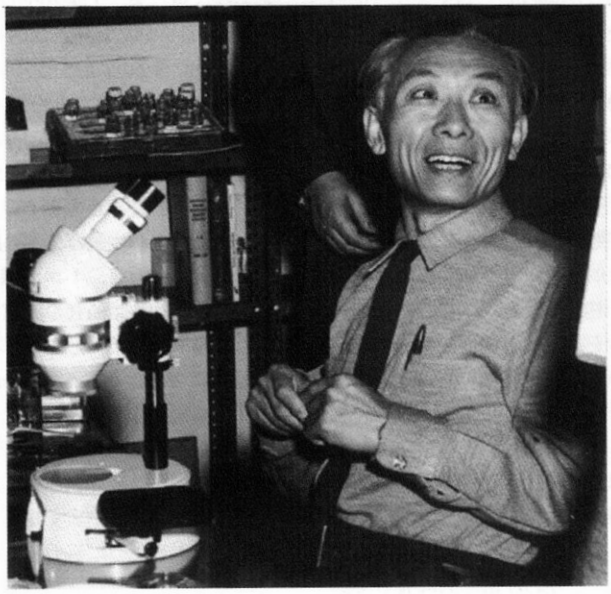
南紀生物，44(1)：1–3，2002

時岡　隆先生を偲ぶ

西川輝昭*

Teruaki NISHIKAWA: To the memory of Dr. Takasi TOKIOKA (1913-2001)



南紀生物同好会特別会員，京都大学名誉教授で瀬戸臨海実験所元所長時岡　隆先生は，2001年9月30日，87歳で逝去された。

先生は，退職後も和歌山県白浜町にある瀬戸臨海実験所近くのご自宅で，ご家族や猫たちに囲まれて平安な日々を送ってこられた。心臓病や白内障による視力低下には悩まされたものの，その炯々たる眼光に象徴される強固な意志と明晰な頭脳は最後まで変わることがなかった。先生は，該博な知識と深い洞察力を駆使して，動物の系統や進化について独創的な考察を進めておられたが，その多くは，突然の心臓発作によって惜しくも日の目を見ずに終わることになった。葬儀は近親者のみで行われ，ご遺体は和歌山県立医科大学に献体された。

先生は本会や本誌との縁が深かった（例えば，時岡，1994）。その恩師を偲ぶ小文を，編集委員会のお勧めによってここに綴らせていただけることを深謝する。

ご　経　歴

時岡先生は，1913（大正2）年12月19日に福岡市に生まれ，1930（昭和5）年3月山口県立山口中学校を修了された。同年4月山口高等学校理科甲類に進学，1933年3月に同校修了後，同年4月京都帝国大学理学部動物学科に入学され，駒井卓教授（1886-1972）の薫陶をうけつつ1936年3月に卒業された。伊豆須崎にあった三井海洋生物研究所勤務を経て1938年6月に京都帝大助手として着任後，1977年4月に停年退職されるまでのほとんどを，白浜町にある理学部附属瀬戸臨海実験所で過ごされた（1975年から所長）。

この間，1947年に京大農学部附属水産実験所助教授として日本海岸の舞鶴に赴任されたが，翌年には理学部講師への降格を申し出て白浜に戻られた。とにかく研究がしたい一念だった，と先生は述懐されていた。その後，1954年に理学部助教授，そして1973年には故内海冨士夫

* 名古屋大学博物館（〒464-8601 名古屋市千種区不老町）
The Nagoya University Museum, Chikusa-ku, Nagoya 464-8601, Japan

先生の後任として教授になられた。

先生は、1940年4月から翌年1月までパラオの熱帯生物研究所に滞在され，また，1942年からは徴兵されて中国大陸北部におられた。戦後は，大阪市立自然史博物館によるトカラ列島（1953年）やニューカレドニア島（1958年）の学術調査に参加された。

研究業績

先生は，世界的に著名な卓越した分類学者・海洋生物学者として，尾索動物（固着性，浮遊性とも），毛顎動物，有櫛動物，浮遊性軟体動物，甲殻類（寄生性の *Argulus* など），等々の幅広い動物群を手掛けられ，多数の新種も創設された。研究論文や単行書分担執筆は，1936年の *Argulus* の分類・発生に関する数編をかわきりに総計約220編に及び，流麗な英文による正確な記載と精細かつ美しい描画が印象的である。2000年出版の『動物系統分類学・追補版』（中山書店刊）に執筆された有櫛動物（新分類体系の提唱を含む）と毛顎動物の章が絶筆となった。なお，先生の業績目録が瀬戸臨海実験所の大和茂之博士によって整えられており，本稿もその恩恵を受けている。

ご業績の一端をホヤ類について紹介すると，単行書『相模湾産海鞘類図譜』（岩波書店，1953）や『Pacific Tunicates of the United States National Museum』(Smithsonian Institution，1967）は，とりわけ世界的に有名である。後者は，ロックフェラー財団と National Academy of Sciences の招聘による1956年2月から翌年5月までの米国滞在中に行なわれたご研究に基づいている（出版年が遅いのは，出版者側の都合による）。ホヤ類分類学者として著名な先生の訃報に接して，ホヤ学の連絡誌『Ascidian News』（50号，2001）と『海鞘』（15号，2002）は追悼文を掲載した（依頼により，ともに西川が執筆）。

時岡先生はまた，1973年10月に白浜町と串本町で開催された第2回腔腸動物国際シンポジウムを組織され（時岡，1973），その大部な論文集を故西村三郎先生と共編で出版された。

なお，先生にこれまで献じられた学名は，管見のかぎり以下のとおりである：毛顎動物で *Tokiokaispadella* Kassatkina，ホヤ類では *Lissoclinum tokiokai* Eldredge，*Distaplia tokioka* Kott，*Eudistoma tokiokai* Nishikawa，*Styela tokiokai* Nishikawa。

プランクトロジストとして

時岡先生は，プランクトン学者としても優れた仕事をされ，日本プランクトン学会の名誉会員に選ばれている。同学会の英文誌と和文誌（いずれも49巻1号，2002）には追悼記が掲載された（依頼により西川が寄稿）。1968年には，分類学やバイオマス調査用の動物プランクトン保存法を検討する SCOR/UNESCO Working Group 23 の正式メンバーとして，U. S. National Museum（当時）で開催された会議に出席された（時岡，1968：冒頭に掲げた写真はその時のもので，D. M. Damkaer 博士の提供による）。毛顎動物に関する先生の多彩なご研究に対しては，単行書“The Biology of Chaetognaths”(Bone, Q., H. Kapp & A. C. Pierrot-Bults eds, Oxford University Press，1991）が先生に献じられた。それについて先生は，「私もさることながら，久しく私の仕事を支えてくれた妻子を大いに喜ばせました」と私に手紙を下さった。

プランクトン学者としてのこのような栄光の代償であろうが，過度の検鏡は先生の眼を傷めた。とりわけ，強い透過光が必要な，オタマボヤ（尾虫）類の厚みのある胴体に含まれる諸器官の詳細な観察とスケッチが，晩年の視力低下を招いたと思われる。

米国の海洋生物学者 Robert Bieri 博士とは，近底性プランクトンの微細分布を定量的に調査するためのそり型トロールの製作（Bieri & Tokioka，1968）その他を通じて，生涯の親交を結んだ。時岡先生は Bieri 博士を，国籍で研究評価を左右するような英米人の一部にある誤りを打破するために努力した自由主義者として，尊敬しておられた。

駒井先生，丘先生との縁など

時岡先生は，「駒井先生を頼って京大にはいり，いただいたテーマに忠実に」研究をすすめ，「自分は駒井先生の分類の方における正当的後継者として生き残っている唯一人」と自らを語っておられる（『駒井卓先生を偲ぶ会』（1999年11月6日の同会記録，2001年5月発行）に寄せたメッセージより）。時岡先生の千恵夫人が駒井卓先生の娘婿（駒井喜雄様）の実妹という関係のため，駒井先生へのあからさまな礼賛は避けておられたが，強い敬慕の念は周囲に伝わって来た。駒井先生が集められた多量の別刷を動物群別にハトロン紙できちんと製本して，瀬戸臨海実験所図書室に配架されたことひとつにも，それがうかがえる。

駒井先生は東京高等師範学校在学中，進化論関係の著作で今に知られる丘浅次郎博士（1868-1944）に師事されたと聞く。丘先生は日本の尾索動物学の草分けでもあるが，時岡先生はその孫弟子にあたることになる。尾索類の研究を始めた時岡先生に重要文献多数を貸すことになった丘先生は，「私の眼の黒いうちは自由に使ってくれてよいが，その後は，息子（英通博士）がホヤにも興味を持っているので，戻してほしい」とおっしゃっられ

た。後に，時岡先生が出征中のことだが，白浜でも米軍の空襲が激しくなって来たので，実験所員が気を利かせてこの文献類を丘先生宛てに荷造りして国鉄白浜口駅（現 JR 白浜駅）に托したところ，グラマン機による爆撃で駅もろとも灰塵に帰した。終戦まぎわの1945年7月25日のことであった。このため，時岡先生は，戦後，文献欠乏の状態から研究を開始しなければならず，文献参照不足の「恥をしのんで」（ご自身の言葉）論文を書きまくり，別刷りを海外に送っては交換で文献を入手した。丘先生への“借り”を返そうと，当時は必死であった。

時岡先生のこうした論文発表の主な舞台となったのが『Publications of the Seto Marine Biological Laboratory（瀬戸臨海実験所紀要）』（1949年創刊の英文誌）である。先生は，その編集発行に情熱を注ぎ，国際的評価を高めることに大きく貢献された。投稿原稿には，必要に応じて徹底的に手を入れるなど親身の世話をされた（著者に加えよなどと決しておっしゃらなかったのは言うまでもない）。同所にある内外雑誌類の相当部分は，紀要との交換によって集められたものと聞く。このような功績と卓越した研究業績に対して，1968年度和歌山県文化賞が授与された。なお，実験所の図書室には，海洋生物学の広い領域にわたって内外雑誌から採取された先生手書きの論文カードが膨大な枚数，ファイルされていた。先生はこれをも「実験所にいる人間としての当然のサービス」といわれていたが，現代ではとても真似のできないことである。

自然保護運動への挺身

時岡先生の社会的なご活動として，1967年から69年にかけて白浜町で湧き起こった，海岸埋め立て反対運動のリーダーの一人としての活躍がある（山本，1989）。埋め立ては結局強行されたものの，自然環境保護にかける先生の情熱と行動力は，田辺湾に浮かぶ海洋生物の宝庫，畠島のリゾート開発を阻止するという形で実を結ぶことになった。この島が1968年に京都大学によって購入され，生物保護区として専ら研究に供されるについての先生の奔走は一通りではなかった。先生は，こうして開発から免れた畠島において生物相の長期モニタリングに着手され，関連する論文もいくつか発表された。『白浜町誌・自然編』（1982）に寄稿された「白浜の自然」は，地元の自然環境に対する先生の愛着と畏敬の現れである。

先生はまた，田辺湾を隔てて白浜町の対岸にある天神崎の保全運動にも助言を惜しまなかった（玉井，2001）。

「今はもう蟲も殺せぬ齢かな」

先生は切手収集家としても有名で，コレクター向けの入門書を戦後まもなく著された程である。1年余の米国滞在中には食事代を節約して切手を購入された由。最晩年まで，「老化予防の高貴薬」として切手商から購入を続けられた。先生とご家族は猫好きとしても知られ，お世話を期待して門前に置き去られた多数の猫を，個々に名前をつけて慈しまれた。

コノハチョウ発見を伝える本誌掲載の短報（時岡，1996）で先生は，「故郷から遠く白浜の地に運ばれて，なお生き続けている蝶を，証の標本として殺すにはしのびなかった」と記された。送ってくださったその別刷の余白には，「今はもう蟲も殺せぬ齢かな」と書き添えられていた。奥様からいただいた2002年の喪中欠礼挨拶状にある「研究の為とは申せ数々の小さき命，奪いし故に献体決めし老生物学者」との言葉ともども，先生が到達されたある透徹した境地が感じられる。

本稿の準備にあたりお世話になった，大和茂之，時岡みゑ，D. M. Damkaer，大石茂子，中内光昭，加藤憲一，小林直正，荒賀忠一，植村博樹の各位に深謝する。不肖の弟子である私を常に温顔で見守り励まして下さった恩師に対して，感謝と追慕の念はいくら語っても語り尽くせない。時岡先生の，研究にかけるすさまじいまでの情熱と執念を，自恃に基づく凛とした生き方とともに，常に思い続けたい。

引 用 文 献

Bieri, R. & T. Tokioka. 1968 : Dragonet II, an opening-closing quantitative trawl for the study of microvertical distribution of zooplankton and the meio-epibenthos. Publ. Seto Mar. Biol. Lab., **15**, 373-390.

玉井済夫．2001：時岡隆先生を偲んで．天神崎だより，**83**，2.

時岡　隆．1968：SCOR/UNESCO Working Group 23 第1回会議．日本プランクトン学会報，**15**，38-41.

————．1973：第2回腔腸動物国際シンポジウムの記録．日本プランクトン学会報，**19**，133-136.

————．1994：虎楠節考．南紀生物，**36**，35-44.

————．1996：コノハチョウ白浜に舞う．南紀生物，**38**，86.

山本かほる．1989：海はみんなのもの—横浦湾埋立をめぐる住民運動の記録．220．朝日カルチャーセンター，大阪．